読書の四季

「三余読書、七生滅賊」

国語科教諭　古谷　徹

安政元年（1854）、吉田松陰（1830～1859）はアメリカへの密航に失敗して自首、逮捕収監された。その後長州に送られ、一年にわたって野山獄で幽囚生活を送った。この時松陰は狭い居所の右に「三余読書」と題し、左に「七生滅賊」と題して読書に打ち込んだという。

三国魏の董遇は、弟子にひたすら読むことを勧め、「読書百徧にして、義自ら見（あらは）る」といった。暇がないと言うと、「三余」に読めという。「三余」とは、「冬は歳の余り、夜は日の余り、陰雨は時の余り」だという。（『三国志』王粛伝注引『魏略』）。

松陰は、董遇の三余は天道の常であり、余りとするに足りない、だが、刑死を覚悟して待つ自分は、君父の余恩により食事を与えられ、幽囚の身でありながら隙間からの余光に照らされ、とっくに死んでいるはずの身でありながら余命を生きている。これこそ三余であるという。（「三余説」）。

「七生滅賊」は、楠木正成の故事である。楠木正成は死に際し、死んでどうするという弟正季のことばに、七回生まれ変わって国賊（足利尊氏）を滅ぼすのだ、といったという。（『太平記』巻十六「正成兄弟討死の事」）

松陰はこれについて、正成の死後、彼の子供達や新田氏、菊池氏などが、正成の理や気を受け継いでいるのだから、七生どころか正成は死んでいないし、その後の（南朝の）忠孝節義の人を見れば、七回どころか数えられないほど生まれ変わったという。松陰は今自分は不忠不孝の身となったけれども、後世の人が自分を見て立ち上がり、「七生」すればよいといった。（「七生説」）

松陰は三余読書こそ七生滅賊の本であり、七生滅賊こそ三余読書の効であるといった。（「続二十一回猛士説」）

野山獄以前、長州に送られる前に松陰が詠んだ詩の題に、次のようなことばが見える。

夜、読みて後、書す。余、魯質劣根、読書極めて鈍し。一年の中を略計するに、当に五百巻を過ぎざるべし。則ち万巻の書を読むには、須らく二十年を用ふべし。

松陰が野山獄に入ったのは安政元年十月二十四日、その後、出獄までの一年余りで読んだ書物は、倫理哲学、歴史伝記、地理紀行、兵学、詩文、時務、医学など、総計六百十八冊に上ったという（梅原 2003）。なるほど二十年あれば万巻の書を読んだに違いない。

学習院高等科
図書委員会

会　報
No.110

発　行
2014.7.19

松陰の読書はただ読むだけではない。「書を読む者は其精力の半を筆記に費すべし」（天野 1908）ということばが残るように、松陰は読んだ上で要所を書き写し、さらに詩や文を書いた。

思想家佐々木中はルターやムハンマドを念頭に、「読むこと、読み変えること、書くこと、書き変えること――これこそが世界を変革する力の根源である」と指摘している。（佐々木 2010）

野山獄を出た松陰は出身の杉家に禁錮され、その間世に名高い松下村塾を開いた。それはわずか一年ほどだったが、この時期に得た弟子達によって長州藩は変わり、彼らはやがて日本を変えていった。

松陰の読書は、確かに世界変革の原動力となったのである。

【引用・参考文献】
天野御民『松下村塾零話』山陽堂。1908年。梅原徹『吉田松陰』ミネルヴァ書房。2003年。中等科所蔵。
佐々木中『切りとれ、あの祈る手を』河出書房。2010年。高等科所蔵。
なお、松陰の作品は『吉田松陰全集』（岩波書店 1935年版。）に拠った。

ブックトリップの季節なのだ！

ブックトリップ、それはただ適当に歩いて本を物色し、その土地の旨いものを食って選んだ本について語り合う企画です。記念すべき第一回は神保町！古本とうまいものの町に行ってきました。

［今回のルート］
神保町駅→うどん　丸香→東京堂書店→散策→東京堂書店

［食事レビュ～］
やってきたのは「うどん　丸香」！食べログでは神保町№1のお店です。ついたのは午後二時ごろでしたがお客さんはいっぱいだった。しかしここで大きなハプニング！同行しているU君がお冷のやかんを倒しちゃったんです。一年生はそれを冷やかな目で見つめる中、席について僕は釜揚げ、U君は肉うどん、一年生は二人とも釜玉、それと野菜天とかしわ天を頼みました。いやぁ、これが超おいしい！かけのつゆに鰹節が効いててちゅるちゅるいっちゃいました。さつまいもの天ぷらも鶏もも肉の天ぷらもおいしくて幸せでした。それでは評価に参りましょう、、今回の格付けは～～～～☆☆☆☆四つです！なぜ四つかというとU君が水をこぼしたりこしょうの栓をうどんの中に落としたりしたからです。いよっ！次回に期待！

［ブックトリップ］
おいしいものを食べて腹ごしらえをした後、我々は起点である東京堂書店に向かいました。この書店は改装したばかりで新しくカフェが併設されたいい環境なんです。ここでまた集合！と言って一年と二年に分かれ、僕達がまず向かったのは『神保町古書モール』。三省堂書店の近くのビルの五階にある古本屋です。ここには井上ひさしの草稿やふるーい雑誌などがあり、常に好奇心をそそられました。しかし買いたい気持ちをグッと押さえて次はそのビルの四階にある『古書かんたんむ』へ。ここは様々な古書店が、店の棚を借りて本を置いているというちょっと変わった古書店なのです。入口を入って左にある特価コーナーには百円の本がたくさん置いてあって学生にはうれしいかぎりです。

今回僕が買った本は北隆館出版の『原色植物検索図鑑』。そのまんまですが、この花は何かを調べる際に非常にわかりやすいのです。検索図表、といって例えば茎や葉の形から調べたり、おしべの数から調べることができたりするのです。見ていると楽しくなっちゃう本でした。

また、太宰治好きのU君は『斜陽』や、三島由紀夫の『花ざかりの森』を買ったりしていました。

そんなこんなで時間も過ぎ、東京堂書店に戻ってコーヒーブレイクをしたのでした。

［今回手に入れた本一覧］
『斜陽』太宰治著

『花ざかりの森』
三島由紀夫著

ブックカフェに行く！

～「イココチ」編～

東高円寺駅から徒歩二分、大通りから路地に曲がるとラーメン屋さんの隣にある。小さくてかわいらしいお店で、軒先には暖かい光が差し込んでいる。

中に入ると小さい本棚とソファ、奥にはカウンターがあり、四人がけのテーブルと二人がけのテーブルが一つずつ置かれている。

本棚には児童書を含めて建築の本、芸術の本など、普段は読まないような本ばかりであった。そんな中発見したのがタイトルに惹かれて手に取った「ビフテキと茶碗蒸し」だった。―

うぬ、うぬぬぬぬ。難しい！アメリカ人の自由主義と日本人を比較してほにやらら。居心地は良いのですが、今回は選書に失敗してしまい、少し後悔が残ってしまいました。そうだ　次回は絵本にしよう。それが僕の得た教訓です。皆さんに伝えたいのは絵本などの軽めの本をとったほうが良いということです。

ちなみに今回は初めての「ブックカフェ」でしたが、自分の興味のある本を手に取って、落ち着いた雰囲気を楽しんでいただけたらと思います。

ではでは。

～ライブラリーショップ&カフェ日比谷～

国を動かす省庁が並ぶ霞ヶ関。その隣の日比谷公園の中には日比谷図書文化館という千代田区立図書館があります。

その図書館は、本の揃えも素晴らしいのは勿論、外観、内装ともにさっぱりしており、そこに居るだけで楽しくなるような場所です。

我々が行ってきた処はそこの1階にある「ライブラリーショップ&カフェ日比谷」です。

コーヒーとサンドウィッチを頼んだら、木漏れ日差し込む窓際の席に腰を下ろした我々。その手には、図書館から持ってきた本あります。そう、ここのブックカフェの魅力は図書館から本を自由に持ち出して、読めることなのです。この環境は、本とコーヒーを愛する人にとっては、最上のものと言っていいのではないでしょうか。

そのうえ、店内ではオシャレな卓上小物や、趣味関連の本も販売されており、その本と共に、コーヒーを嗜むこともできますよ。

また、ブックカフェ特有の利点といえば、本を読みながら、友達と自由に会話できることではないでしょうか。図書館では、会話は慎まないといけませんが、ここではそんなこともありません。是非とも、本好きのお友達を誘って行かれてはいかがでしょうか。勿論、お一人でもその素晴らしい環境の恩恵を十分に味わえることは言うまでもありませんよ。